

日本社会事業大学同窓会 栃木県支部

会報 いずみ 第11号

栃木県支部事務局：真岡市高勢町 2-248-5 菊池方 TEL090-2321-0902

発行 令和5年11月

岩崎俊雄前会長逝去



令和5年4月14日、岩崎俊雄前会長（社会福祉法人すぎのこ会会長）が逝去されました。75歳でした。

岩崎氏は母校同窓会会長も務められ、永年にわたり日本社会事業大学に多大なる貢献をされました。

温厚篤実なお人柄で多くの方に愛された方でした。

感謝申し上げるとともにご冥福をお祈り申し上げます。

（すぎのこ会 HP より）



令和 5 年度総会開催

令和 5 年 9 月 30 日、日本社会事業大学同窓会栃木県支部の総会が開催され、10 名の会員が参加されました。

会場は、石橋顧問のご厚意により、社会福祉法人パステルの CSW おとめ（小山市）をお借りしました。

今回は来賓として同窓会本部木村副会長にお越しいただき、母校の近況などお伺いいたしました。



『老大木スズカケノキ保存の願い』

《学部 6 期 田村匡彦》

下野三楽園は県内唯一の任意の団体による育児施設（現在の児童養護施設）として 1912（大正元）年 11 月に開設されました。団体役員となった矢板武が財団法人化実現に不安を感じていたスタートでもありました。

それまでは栃木県は隣県の前橋市にある育児施設に預ける等で凌いでいたのです。園の開設に県、宇都宮市が強くかかわりを持ちました。

財団法人化を目指していた創設時の下野三楽園は当時外来樹種として手に入り難ったスズカケノキの若木を 4 本園庭に植栽しました。子ども達の成長への願いと緑陰を得るためでした。園の経営は女子職員の寮（家庭舎）内住み込み勤務抜きに成り立たないもので戦前、戦中、戦後それぞれの困難があったのですが、そうした子ども達と職員を励まし見守ってきたのです。

1971（昭和 46）年 6 月施設は市内篠井に移転しましたがスズカケノキは残りました。

栃木県立美術館が1972（昭和47）年11月開館しました。それから50年多くの来館者を迎え、建物入口にある樹齢百数十年とされるスズカケノキは入退館の度に仰がれ、美術館のシンボルとして親しまれています。

栃木県は県制150周年を機に美術館を県立体育館跡地に移転することになっています。こうした状況に下野三楽園関係有志が「老木スズカケノキの保存を求める会」を作り、今年6月14日知事宛「要望書」を提出しました。というのも美術館跡地に宇都宮中央警察署移転が予定されているのです。そうなればスズカケノキの命運が危ぶまれることになります。

栃木県の戦前からの児童養護の歩みを証する記念物である老木の保存を実現するため、会事務局として模索する日々を過ごしています。



（上）田村さんの著作です

（左）県立美術館のスズカケノキ

（重要！）会費納入・カンパにご協力お願いします！

同窓会の会計はほぼ底を尽いている状態です。繰越金813円って、つまり貯金0って意味です。今回総会会場を石橋顧問にお借りしたのも、実を言えば例年使っているホテルの使用料が払えないからです。このままですと会報すら発行できなくなります。

同窓会の円滑な運営のため、会費(2,000円)納入とカンパにご協力お願いいたします。

○振込口座 筑波銀行 鹿沼支店 普通口座 1030143 菊池浩史

令和4年度 決算報告

収入			支出		
会費	40,000	2,000円×20人	通信費	50,635	会報、通知
補助金	30,000	五味基金	総会費	36,300	会場費等
寄付金	6,000		印刷費	20,220	会報、通知
繰越金	58,596		慶弔費	20,600	2名
			消耗品費	4,928	紙代等
			雑費	1,100	
収入計	134,596		支出計	133,783	

収支差額 813円 (令和5年度に繰越)

令和5年度 予算

収入			支出		
会費	60,000	2,000円×30人	通信費	50,000	会報等発送費用
補助金	30,000	五味基金	総会費	5,000	会場費等
寄付金	4,000		印刷費	20,000	会報等印刷費用
雑収入	1,000		慶弔費	20,000	慶弔費用
繰越金	813		消耗品費	3,000	用紙代等
			会議費	1,000	お茶代
			雑費	6,813	
収入計	95,813		支出計	95,813	

編集後記

私は40代のころから、「50代は人生の集大成の一つ」と感じていました。というのも、私の周りには50代で職場の表舞台から消えていく方がたくさんいたからです。

40代までは勢いでいけても、50代からはそれまで身に着けた力をどう使っていくか。

不勉強な人、力の使い方を間違っている人は50代で落ちていくのだろう、そして、それを理解している自分は50代を充実して過ごせるだろうと思っていました。

ところが！50代早々に、私は自分にこんなことが起こるとはまったく想定していなかった事態に見舞われ、高転びに転びました。

毎日大変強い不安を感じながら生活していますが、こうなってみると、自分の至らぬ点があらためて見えてきたり、また自分を心配してくれる人、応援してくれる人が意外にたくさんいたりして、これには本当に励まされます。

振り返ってみればいい経験だったと、そう思えるようになりたいものです(事務局 菊池)